

1930年代の家電って、どんなの？

嘉数 次人

1. きっかけは大阪中之島美術館

今年の4月9日から7月3日まで、科学館のお隣にある大阪中之島美術館の特別展「みんなのまち 大阪の肖像」第一期に、科学館から大阪市電気局と電気科学館関係のポスターを8点出品していました。ポスターは、いずれも1933(昭和8)～1943(昭和18)年に製作されたもので、図1はその中の一枚です。レトロモダンなデザインが目を引きませんが、よく見ていくと、「大阪市電気局って何?」、「市電の店って何?」、「家電製品を販売しているの?」といった疑問がいくつか浮かびます。

この中で、大阪市電気局というのは、かつて大阪市に設置されていた部局の一つで、路面電車や地下鉄などの交通事業に加えて、家庭や事業者への電気供給事業も行っていました。そして、電気に関するサービスセンターとして設けられたのが「市電の店」です。さらに1937(昭和12)年に開館した大阪市立電気科学館も、電気知識の普及のために電気局が作った施設でした。

科学館には、ポスター以外にもカタログ誌「市電の店ニュース」など当時の電気局の資料がいくつか伝わっていて、1930年代の家電製品の様子を窺うことができます。ここでは、それらの資料を通して、当時の家電製品を見てみましょう。



図1. 大阪市電気局「市電の店」の電気ストーブ宣伝ポスター。1935年頃。

2. 大阪市電気局

大阪市電気局は、1923(大正12)年から1946(昭和21)年まで存在した大阪市の一部局です。大阪市では、1903(明治36)年に市電の運行を開始し、その後電車を動かすための電力を供給する発電所も設置しました。そして、余剰電力の販売や、インフラとしての電気事業の市営化の議論等を経て、1923年に民間の大阪



図2(左):電気科学館1階にオープンした市電の店。

図3(右):電気局発行の「市電の店ニュース」第一号の表紙。1931年発行。

電灯株式会社を買収し、本格的に配電事業に参入したのです。その際、電気局が設置され、電力供給業者から買った電気に加えて自前の発電所で作った電気を、大阪市域を中心に家庭や事業所などに供給しています。1932(昭和7)年度の統計によると、年間の総消費電力は約1億3,800万Kwh、電灯需要家数が約51万軒、電熱需要家数は約5万軒とあります。

3. 市電の店

当時、大阪市内で電気供給を行う事業者は複数ありました。そのため、電気局は電気需要の拡大、供給シェア拡大に向けて、広報活動や営業所、ショールームの設置など、様々な活動を行っており、その一環として設置されたのが「市電の店」です。

「市電の店」は電気製品の販売のほか、契約や工事等の相談窓口も持ったサービスセンターで、1931(昭和6)年に九条にある電気局庁舎の1階でオープンし、1937年には開館した電気科学館の1階にも設置されました。図2は電気科学館の店内の様子ですが、現在の家電量販店のように数多くの製品が陳列されています。冷蔵庫や掃除機といった当時まだ高価で珍しかった製品も見られ、店中を見て回るだけでも楽しかったことと思います。

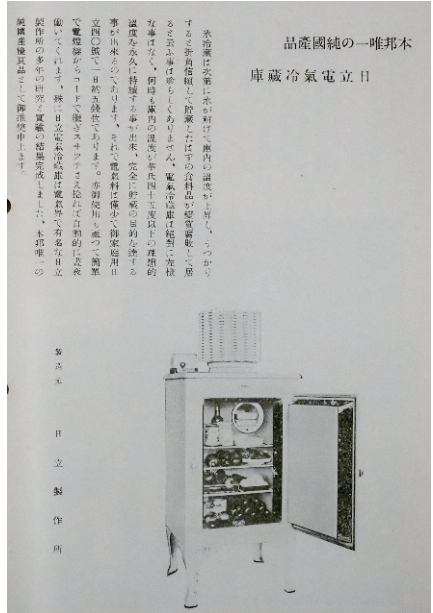
4. 「市電の店ニュース」で見る1930年代の家電製品

市電の店では「市電の店ニュース」という冊子を発行していました(図3)。これは店内で販売していた様々な家電製品が紹介する、いわゆるカタログ冊子で、科学館には1931年から1935年に発行されたものが残っています。これを今の視点から見ると



図4(左): 扇風機の宣伝。「市電の店ニュース」第24号(1933年)。

図5(右): 電気冷蔵庫の宣伝。「市電の店ニュース」第32号(1934年)。



1930年代の電気製品の様子がよくわかる資料としての価値もあります。

中身を見ていくと、当時の家電製品の種類がとても多いことに気づきます。照明器具や扇風機、ラジオに加え、電気七輪などの調理器具、ストーブ、電気アイロン、さらには冷蔵庫や洗濯機、掃除機、アイスクリームメーカーまであり、想像以上に豊富です(図4、5)。また、冊子に掲載されている製品には、国産品もたくさんあることから、国産家電の発売開始時期を調べてみると、なんと、1930(昭和5)年頃までには、現在でもおなじみの家電製品の多くが登場していたことがわかります(表1)。

製品	発売
電球、照明器具	1890(明治23)年
扇風機	1894(明治27)年
電気ストーブ、アイロン	1915(大正4)年
炊飯電熱釜	1921(大正10)年
ラジオ	1927(昭和2)年
洗濯機、冷蔵庫	1930(昭和5)年
真空掃除機	1931(昭和6)年

表1: 国産家電製品の発売開始年 (注1)

その一方で、1930年代において家電製品は高価でした。「市電の店ニュース」にある1933年頃の中心価格帯は、電気アイロンが2~6円、扇風機・ラジオが25~40円、洗濯機が150~200円、冷蔵庫が500~1,500円です。また全国における家電普及状況については、1937年7月当時の統計があり

(表2)、例えば掃除機や洗濯機は全国で1万台にも満たず、一般家庭にはほとんど普及していなかったのが実情です。

そのような中、ラジオ受信機は1936年の世帯普及率が約20%で、当時としては比較的普及が進んでいた家電だそうです。電気局によると市電の店でのラジオ販売台数は、1937年4月が54点、6月が40点、8月は731点とあります。8月の売り上げが多いのは、甲子園の夏の野球大会(当時は全国中等学校優勝野球大会でした)のラジオ中継を聞くための需要が大きいためとの事です。そこで、夏季に発行された「市電の店ニュース」のラジオの広告を見ると、「甲子園の野球大会始まる」(図6)、「ラジオの買い時、野球放送始まる」といったキャッチコピーが見られ、市電の店やメーカーによる販売戦略が垣間見えます。

電気アイロン	3,131,000
電気時計	418,000
電気冷蔵庫	12,215
真空掃除機	6,610
電気洗濯機	3,197
ルームクーラー	290

表2:1937年7月の全国における家庭用電気機器の普及台数(注2)



図6:1933年8月の「市電の店ニュース」第26号にある松下電器のラジオの宣伝。

このように、「市電の店ニュース」は、1930年代の家電製品の種類や値段、技術的、産業的な様子がわかる良い資料になっています。また、「便利」、「衛生的」といった言葉が並ぶ宣伝文や、人物モデルを起用して製品イメージを引き立てようと意図した写真などは、マーケティング史やデザイン史の観点から見ても興味深い資料ではないかと思えます。

なお、1942(昭和17)年3月には国の電力管理により大阪市の配電事業は終了し、それに伴い「市電の店」も営業を終了しました。

嘉数 次人(科学館学芸員)

【注】

- 1:家庭電気機器変遷史編集委員会編『家庭電気機器変遷史』1999年、社団法人家庭電気文化会、による。
- 2:前島正裕「電力技術の発達から見た我国の家庭電化に関する一考察」、『国立科学博物館研究報告 E類』第16巻、25-34ページ。